

# 國學院大學學術情報リポジトリ

〔談話室〕 「研修」は「研究」と「修養」を合わせた言葉なのか

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2024-03-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 齋藤, 智哉, Saito, Tomoya メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/0002000200">https://doi.org/10.57529/0002000200</a>

# 「研修」は「研究」と「修養」を合わせた言葉なのか

齋藤智哉

「研修」という言葉。社会に出ると何かにつけて研修があります。その言葉を見たり聞いたりするだけでウンザリしますよね。わかります、その気持ち。しかし、ここではその研修について、ちょっとだけ考えます。お茶でも飲みながらお付き合い下さい。

私は日頃、全国の学校を訪問し授業研究を中心とした校内研修で教師から学びつつ、近代日本の学校教育における「修養」の歴史研究を細々と続けています。学校改革を支援するスーパバイザーとして、教師の成長に寄り添い、教師とともに各教科の学びの本質とは何かを日々考えられるのは、教育方法学者にとって得がたい経験と喜びです。

平成十八年の教育基本法改正以降、修養関係の研究等で、研修は研究と修養を合わせた言葉との見解が散見されるようになりました。旧教育基本法で教員の規定は第六条（学校教育）第二項の「法律に定める学校の教員は、全体の奉仕者であつて、自己の使命を自覚し、その職責の遂行に努めなければならない。（略）」のみでした。しかし、現行法で第九条（教員）が新設されました。その第一項は「法律に定める学校の教員は、自己の崇高な使命を深く自覚し、絶えず研究と修養に励み、その職責の遂行に努めなければならない」、第二項は「前項の教員については、その使命と職責の重要性にかんがみ、その身分は尊重され、待遇の適正が期せられるとともに、養成と研修の充実が図られなければならない」です。研修＝研究＋修養の背景には、第二項にある「研修」は第一項の「絶えず研究と修養に励み」を受けているという解釈があるようです。この件に様々な議論が存在することは承知していますが、詳細な検討は紙幅の都合で割愛します。ごめんなさい。

修養は日本の伝統的な自己形成概念だと考えられています。しかし、修養には、いまだに一定の定義がありません。それほど難しい概念なのです。修養は朱子学に由来します。日本では近世以来の「養生」との関係を示唆する研究もあります。いずれにせよ、日本で近世まで使われていた修養は、一部の知識人が知る言葉でした。ところが近代に入ると状況が変わります。中村正直は、明治四年にスマイルズの*Self Help*（邦訳名『西国立志編』）を翻訳刊行し、*cultivate* や *cultivation* を修養と訳すだけでなく、教養や教育とも訳しました。同書は明治十年頃まで小学校の副読本として広く読まれ、市井で読み聞かせもされたそうです。参考までに本学所蔵の辞典で修養の意味を調べてみると、『新編漢語辞林』（明治三十七年）の「ステニミニツイテ并ルノヲサメ、サラニ又ヤシナヒソダテル」が最古でした。なお、同辞典で教育と教養が共に「ラシヘソダテル」だったことは、中村の翻訳を踏まえれば興味深く、*education* の翻訳事情も踏まえて考察する必要があります。中村の翻訳から辞典に掲載されるまでの間に、新渡戸稲造の『修養』も出版されていますが、中村と新渡戸の修養は必ずしも同じとは言えません。おっと、本稿の主題は研修でした。研修は本学所蔵の辞典だと『大日本国語辞典』（大正五年）が最も古く、「学芸などをみがき修むること。研究。」となっています。修養の意味は含まれていないようです。

ここまでくると、研修も修養も教養も教育も何なのかがわからなくなります。どうしましょう。途方に暮れます。お茶を飲んでいる場合ではありませんでした。すみません。

そういえば私の修士論文の題目は「折口信夫の師弟関係―かたる行為による伝承と修養―」でした。うっかり修養に取り組んだ結果、とんでもない沼にはまってしまった……ということ、本談話室のオチにしたいと思います。

（教育方法学）